

P2-016

ひらめきときめきサイエンスの新生児医療に関する高校生の学び：NICU入室の有無に焦点を当てて

井上 みゆき¹、根本 篤²

¹和歌山県立医科大学 保健看護学部

²山梨県立中央病院

【目的】

本研究は、科研費成果事業である、ひらめきときめきサイエンス＜体感しよう！小さく生まれた子どもの命を救う、癒す、育てるケアの力、以下本事業＞から、NICUに入室した高校生と入室しない高校生の学びの違いを明らかにし、今後の本事業に役立てることを目的とした。なお、本事業は、高校生がNICUでのケアを知ることと生命に対する倫理観を育むことや、新生児医療に魅力を感じ、将来、新生児医療に携わる者がいることを目標としている。

【方法】

対象者は、本事業に2014年～2018年に参加した高校生である。施設の関係上、2014年と2018年はNICUに入室なしで、2015年～2017年はNICUに入室した。その他の本事業内容は、同じで＜科研の説明＞＜新生児医療の説明＞＜小さな赤ちゃんを育てた母親の体験談＞＜心肺蘇生の演習＞であった。本事業終了後に、プログラムに関する質問と学びの自由記載で構成した質問紙調査を実施し、その場で回収した。解析には、記述統計、自由記載はWordMinerを用い、テキストマイニング法でクラスター分析をした。質問紙は無記名とし、解答するしないは自由とした。

【結果】

対象者は、高校生120名（NICU入室あり71名、入室なし49名）であった。質問紙は120名に配布し120名から回収した。

NICU入室した、しないにかかわらず、全員がプログラムはおもしろく、わかりやすいと回答した。

学びではNICUに入室した高校生は、クラスター1＜初めてのNICUは緊張したが貴重な体験＞クラスター2＜一生懸命生きる姿から尊い命の生命力＞クラスター3＜チームでする救命と家族のケア＞クラスター4＜人の役に立つ医療者になる夢＞であった。一方入室しない高校生は、クラスター1＜知らなかったNICUを知る体験＞クラスター2＜小さな命を育てる大切さ＞クラスター3と4はNICUに入室した高校生と同じであった。

【考察】

NICUに入室した、しないにかかわらず、小さな命を育てる大切さは学べると考えられる。しかし、NICU入室した高校生は、実際に小さいまたは疾患をもつ新生児が懸命に生きている姿をみる体験から、尊い命、生命力といった倫理的感受性を育んでいた。このことは、将来、新生児医療を目指す若者を育てるには重要であると考えられた。

P2-017

若年者の急な傷病者への応急救護実施を阻害・促進する要因の解析：評価尺度開発の試み

長谷川 慶幸¹、青戸 春香¹、金山 俊介²、
遠藤 有里¹、南前 恵子¹、花木 啓一¹

¹鳥取大学医学部 保健学科

²鳥根県立大学 看護学部

【緒言】

急な傷病者に対して一般市民（バイスタンダー）によって応急救護がなされると、なされない場合より救命率が1.8倍高まるとされている。ところが本邦では、目撃された心肺停止対象者に一次救命処置（以下BLS）が実施されるのは56%で、ノルウェー（89%）などに比して、応急救護行動の実施率は著しく低い。本邦で急な傷病者へのBLS実施率が低値である理由としては、一般市民が応急救護行動を実行に移す際の心理的要因の存在が想定されているがいまだ定説はなく、若年層の応急救護に関連する心理的要因についても明らかにされていない。そこで本研究では、若年者を含む一般市民による応急救護実施の阻害・促進要因の特徴を明らかにすることにより、応急救護実践度（実施の意志、実施の阻害・促進要因）を評価する尺度を開発することを目的とした。

【方法】

解析対象は、鳥取県の中学生96名（回収率85.7%）、高校生114名（同100.0%）、非医療系大学生84名（同77.1%）、医療系大学生77名（同62.1%）の計371名（同80.8%）であった。質問項目は、1)回答者の属性：性別、年齢、体格（4項目）、2)応急救護の実施意志（3項目）、3)応急救護を実施できると思う理由（実施促進要因）13項目、4)応急救護を実施できないと思う理由（実施阻害要因）13項目とした。統計解析にはSPSS ver 23を用い、最尤法による因子分析、信頼性分析を行った。

【結果】

応急救護の実施促進要因13項目の因子分析では、「心理的安定」「技術・理解」「自己効力感」「年齢・性別」の4因子が抽出された（ α 係数0.671）。応急救護の実施阻害要因13項目の因子分析では、「技術・理解」「自己効力感」「関わることによる不利益」の3因子が抽出された（ α 係数0.765）。これらの結果を基に、応急救護実践度の尺度として、1) 実施の意志、2) 実施促進4因子、3) 実施阻害3因子を採用した。

【考察】

本研究は、今まで適切な尺度のなかった「応急救護の実践度」の評価に道を開くものである。この尺度を用いて対象者の応急救護の実践度を評価することによって、救命率向上の鍵となる応急救護実施率向上のための方策への示唆を得られると考えられる。